相模経済新聞　2019年7月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命学者
伊藤　俊洋

15

地球のごみ拾い

海洋のプラスチックごみによる汚染が、地球規模で大きな問題になっている。海岸に打ち上げられた鯨の死骸の胃袋に、重さ40キログラムにもなるプラスチックごみが発見された。世界中の海がマイクロプラスチック（MP）とよばれる微小なプラスチックで汚染され、動物プランクトンを含む海洋生物のすべての体内にMPが取り込まれているらしい。当初、MPは消化されずに体内を通過するだけで、海洋生物に害はないと考えられていた。しかし、PCBやダイオキシンなどの有害物質がMPの表面に吸着されるので、海洋生物の食物連鎖によって蓄積、運搬された有害物質が、私たちの食卓にも届くことになる。6月28・29日に開催されたG20会議では、2050年までに海洋プラスチックごみをゼロにする目標を導入することで一致した。

地球温暖化の元凶になっている空気中の二酸化炭素の増加は、250年前の産業革命が起点とされている。当時は、二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化の原因になるなどとは、全く予想されていなかった。1935年に世界初の合成繊維（ナイロン）がウォーレス・カロザースによって合成されて以来、地球上でのプラスチック（合成樹脂）の生産量は、2015年には3億8000万トンに達した。安価で壊れにくいことが長所と言えるプラスチックであるが、一旦ごみになると分解されることなく、最終的に海にたどり着く。生分解性プラスチックの開発が急務であるとともに、プラスチック生産量と使用量の削減、リサイクルシステムと、廃プラスチックの国際的な管理体制の構築と強化が喫緊の課題である。

富士山吉田口登山道5号目から頂上で拾ったごみ（2014年8月4日）

個人レベルで出来る事はないだろうか。私は、毎月、近隣の道路のごみ拾いをしている。旅先でも、早朝に1時間くらい宿舎の周辺のごみを拾う。世界遺産になった後の富士山でも、吉田口の5合目から頂上までの登山道のごみ拾いを行なった。国内だけでなく、海外でもホテルの周辺のごみ拾いを習慣として続けている。環境に散乱しているごみは、どこでもプラスチックごみが大半である。スウェーデンのアビスコ国立公園のハイキングコースにはチリひとつ落ちていなかった。自然を文化遺産として位置付け、身近な自然に対して強い思い入れを抱きながら育った人々の国であることを印象付けられた。人々が、誰しも地球を自分の家、自分の庭と考えることが大切ではないかと考えている。